
ダニエル10章

「大いに愛せられる人ダニエルよ」
10章は、10章～12章の序章。



ポイント

- 一つ目は、10章から12章をひとまとめとして、10章はその**導入部分**。11章は最終預言であり、12章は結びとなっています。
 - 二つ目として、この10章には**キリストとサタンの見えない戦いを垣間見させてくれているので、ユニークな章と言えます**。「われわれは預言者ダニエルによって [このダニエル10章によって] 善と悪との軍勢間の、大きな戦いの片鱗を知ることができる」 (EGホワイト)。聖書の中で “**善と悪との大争闘**”がはっきり出ている章は、聖書のなかでは多くはなく、**ヨブ記、ゼカリヤ、黙示録**くらいでしょう。これは現実の戦いであって、人の心や自然界だけではなく、政治世界でも行われているのです。それから**悪天使の存在、善天使の存在**もあります。何より**キリストご自身の助けの希望**があります。そのようなことが10章からわかります。
-

ポイント（続き①）

- 三つ目のポイントは、**ダニエル書全体の背景**を見させてくれることです。二つ目のポイントとつながりますが、**大争闘**という背景です。1章から6章までは、ダニエルや王たちの体験でした。金の像を拝まないものが死刑にされたり、王の精神状態がおかしくなったり、具体的な歴史的出来事でした。そのポイントは、真の神を礼拝する人々に対する迫害と勝利でしたが、これらの章は内容的にはほとんどが預言なのです。7章から12章は、**それらは天で行われている大争闘の反映でもあります**。**真の神の民に対する迫害**が起こりますが、神の正しいことが明らかとなり、神の民が救われるという内容です。地上でおこる様々な出来事は、天の出来事とそのまま結びついているのですが、この10章からある程度学ぶことができます。**地上のどんなことも、全天の注目している**ところなのです。そのようなダニエル書全体の背景を見させてくれるのが10章です。
-

ポイント（続き②）

- 四つ目のポイントは、この10章に**キリストが現れておられる**のです。“**顕現**”という言葉がよく使われています。ダニエル10：5-6では、「**ひとりの方がいて**」その**服装、体、目、腕、足、声など、すべてにおいて非常に威厳に満ちたお方**として描かれています。この部分と黙示録1：13-16はよく似ています。これはキリストの**顕現**だからです。キリストが人の目に見る姿で現れておられます。それでこの10章は、受肉前のキリストの**顕現**であると解釈されています。キリストの光り輝く栄光のお姿がここにあります**!!** このような意味においても10章は非常に素晴らしい章です。
-

注解 10：1①

10：1 ペルシャの王クロスの第三年に、ベルテシャザルと名づけられたダニエルに、一つの言葉が啓示されたが、その言葉は真実であり、大いなる戦いを意味するものであった。

「ペルシャの王クロスの第三年」これは大体**BC535年頃**と考えられています。ダニエルがバビロンへ連れて来られたのは**BC605年**でしたから、すでに**70年がすぎ**ていました。ダニエルもすでに**80歳前後**という高齢に達していました。

「一つの言葉が啓示されたが、その言葉は真実であり、大いなる戦いを意味するものであった。」これは11章の幻を意味しています。**2章、7章、8章、9章**に続く、**10章から11章**にかけての長い預言の言葉があります。

注解 10：1～2

10：1 ペルシャの王クロスの第三年に、ベルテシャザルと名づけられたダニエルに、一つの言葉が啓示されたが、その言葉は真実であり、大いなる戦いを意味するものであった。

「その言葉は真実であり、**大いなる戦いを意味するものであった。**」最後の預言も、善と悪の大いなる戦いに関するものでした。問題は、2節からですが、ダニエルはどうしてこんなに悲しんでいたのでしょうか。

10：2 そのころ、われダニエルは三週の間、悲しんでいた。

彼はぜいたくな食事をさけて、断食による**熱心な祈り**を捧げました。

注解 10：3

10：3 すなわち三週間の全く満ちるまでは、うまい物を食べず、肉と酒とを口にせず、また身に油を塗らなかつた。

「身に油を塗らなかつた。」中近東では非常に乾燥しますので、身に油を塗って皮膚を和らげるという習慣がありました。しばしばそれがぜいたくになる場合もあったようです。そのようなことを一切やめて、とにかくひたすら神に祈りました。いったいどんな祈りだったのでしょうか。

この年、BC535年頃、10章のダニエルの悩みの一つの背景は、エズラ記4：1から5節と考えられます。ユダヤ人たちがパレスチナに帰って、神殿を建てようとしたら、邪魔する人々がいました。サマリヤ人たちが神殿の工事を妨害したのです。ダニエルはそのことがまず心にかかっていました。

注解 10：3（続き）

10：3 すなわち三週間の全く満ちるまでは、うまい物を食べず、肉と酒とを口にせず、また身に油を塗らなかつた。

そしてユダヤ人たちに帰還命令を出してくれたはずのクロス（キュロス）王に対して、善と悪と両方の勢力が働きかけていました。また、折角**帰還と宮の再建**を認める布告が出たのに、**喜んでそれに応じるユダヤ人たちがあまり多くはなかつた**ということもあったのかもしれません。こうしたさまざまな実情を考え合わせて、ダニエルは悲しみ、そして祈っていました。

注解 10：4～5

10：4 **正月の二十四日**に、わたしがチグリスという大川の岸に立っていたとき、

10：5 **目をあげて望み見ると、ひとりの人がいて、亜麻布の衣を着、ウパズの金の帯を腰にしめていた。**

正月の月というのは、バビロニア・ペルシャ暦によるかユダヤ暦によるか不明ですが、いずれにしても、**ダニエルが断食して祈ったのは過越節の時期と重なります。**イスラエルの民のエジプト脱出を記念する過越の祭りを、彼はどんな思いで過ごしていたことでしょうか。

過越の祭りは、ユダヤ暦の**ニサン月（春分の日後の最初の満月を含む月）の14日の夜から1週間**で、毎年日程が変わります。

注解 10：4～5

10：4 **正月の二十四日**に、わたしがチグリスという大川の岸に立っていたとき、

10：5 目をあげて望み見ると、ひとりの人がいて、**亜麻布の衣を着、ウパズの金の帯を腰にしめていた。**

5節は、キリストの顕現です。つまり受肉以前のご自身。黙示録1：13～16と非常によく似ています。「**亜麻布**」は、普通、祭司がまとっていました（レビ16章）。「**ウパズの金の帯**」のウパズは地名らしいです。おそらく当時ウパズというところで作られる金で作った帯というのがあったらしいです。金の帯をしめるのは王様の威厳を表しています。祭司であり王であるお方がそこに立っておられるのでした。

注解 10：6

10：6 そのからだは緑柱石のごとく、その顔は電光のごとく、その目は燃えるたいまつのごとく、その腕と足は、みがいた青銅のように輝き、その言葉の声は、群衆の声のようであった。

「**そのからだは緑柱石のごとく**」とは、光り輝く純潔さの象徴。「**その顔は電光のごとく**」これは、威厳とか権威を表しています。「**その目は燃えるたいまつのごとく、**」。善と悪とを見通される目。「**群衆の声のよう**」大きなよく響く声、権威ある声です。

この幻を見たのはダニエルだけでした。ほかの人々は、お付きの人たちでしょうか、幻は見ませんでしたけれども、神のご臨在を感じて、

注解 10：7

10：7 この幻を見た者は、われダニエルのみであって、わたしと共にいた人々は、この幻を見なかったが、彼らは大いにおののいて、逃げかくれた。

神のご臨在を感じて、「大いにおののいて、逃げかくれた。」

10：8 それでわたしひとり残って、この大いなる幻を見たので、力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくなった。

10：9 わたしはその言葉の声を聞いたが、その言葉の声を聞いたとき、顔を伏せ、地にひれ伏して、深い眠りに陥った。

そしてダニエルは気絶したようになってしまいます。ところが一つの手があってダニエルに触れ、

注解 10：10-11

10：10 見よ、一つの手があって、わたしに触れたので、わたしは震えながらひざまずき、手をつくと、

10：11 彼はわたしに言った、「大いに愛せられる人ダニエルよ、わたしがあなたに告げる言葉に心を留め、立ちあがりなさい。わたしは今あなたのもとにつかわされたのです」。彼がこの言葉をわたしに告げているとき、わたしは震えながら立ちあがった。

11節で「**大いに愛せられる人ダニエルよ**」と。これは素晴らしい呼びかけです。天使は今、あなたに言葉を告げるためにわたしは遣わされたと言います。

13節以降は、非常に難しいところです。

注解 10：12-13 ①

10：12 **すると彼はわたしに言った、「ダニエルよ、恐れるに及ばない。あなたが悟ろうと心をこめ、あなたの神の前に身を悩ましたその初めの日から、あなたの言葉は、すでに聞かれたので、わたしは、あなたの言葉のゆえにきたのです。」**

10：13 **ペルシャの国の君が、二十一日の間わたしの前に立ちふさがったが、天使の長のひとりであるミカエルがきて、わたしを助けたので、わたしは、彼をペルシャの国の君と共に、そこに残しておき、**

13節で「**ペルシャの国の君**」という言葉が重要です。8：25「**君の君たる者**」、8：11の「**衆群の主**」という言葉も同じヘブル語ですが、人間の王とかいう意味よりも、超自然的な存在を表す時に、ダニエルはこの言葉を用いています。この13節の「**ペルシャの国の君**」それから20節「**ギリシャの君**」21節の「**あなた方の君ミカエル**」など、特別な超自然的な存在を表す時にダニエルはこの「**君**」という言葉を使っています。

注解 10：12-13 ②

ですから、「ペルシャの国の君が、二十一日の間わたしの前に立ちふさがった」とありますが、善天使の行動をじゃましようとしたのが「ペルシャの国の君」であり、この場合、神の天使に逆らって立つ超自然的な存在です。これは、**サタン**と考えられています。ペルシャの王に働きかけて、神の民を圧迫しようとする存在、これはサタンです。「サタンがペルシャ帝国の最高の権威者に働きかけて、神の民に敵意を示させようと努力する一方において、天使たちは捕囚のために働いていた」。そしてやがてそのサタンは、ペルシャの国が滅びたあと、次のギリシャが興ると、今度はギリシャの王にはたらきかけているいろいろな悪を画策します。ですから今度は、「ギリシャの君」（20節）と言われています。

さて、この10章で一番問題になる聖句の一つが、13節の「ミカエル」です。わたしたちはミカエルをイエスキリスト別名と考えていますが、一般にはしばしば、ミカエルは天使と考えられています。

注解 10：12-13 ③

ガブリエルは、神の民に対する啓示の天使、ミカエルはイスラエルの守護天使、というのです。ですからミカエルをただ天使の長ととる。しかし私（ダニエル書講義筆者）はそうとりません。私たちがミカエルはキリストであると言うと、それではキリストは天使か、被造物か、と言って誤解される場合がしばしばあるのですが、その誤解のもとはこの13節「**天使の長のひとりであるミカエル**」という言い方にあります。こんな表現ですと、いかにも天使の長が何人もいて、そのうちの一人がミカエルだという印象で、それがキリストというのではおかしいなとなるわけです。これは、もともとのヘブル語にもいろいろ問題がありますが、一番正しい意味は、天の軍勢の指揮官という意味だと考えられます。

ミカエルという名前は、このほか聖書のどこに出てくるでしょうか。ミカエルはわずか4箇所しか出てきません。このダニエル10：13の次に、12：1「**その時あなたの民をまもっている大いなるミカエルが立ち上がります。**」

注解 10：12-13 ④

それから黙示録12：7、「ミカエルとその御使たちが、龍と戦ったのである。龍もその使いたちも応戦したが、勝てなかった」。

もう一つはユダ9節です。「御使のかしらミカエルは、モーセの死体について悪魔と論じ争った時、相手をののしりさばくことはあえてせず、ただ、「主がおまえを戒めて下さるよう」と言っただけであった」。ここでも「御使のかしら」と誤解を招くような表現になっています。しかし御使いたちの指揮官と考えれば、決しておかしくはありません。

この四か所に共通してお気づきになった点はないでしょうか。ミカエルというのは、常にサタンとの戦いの場面の中で、現れてきています。そもそもミカエルという名前そのものが「神のようなお方は誰か」という意味です。神様のようなお方はだれか、そういった問いかけの意味を持っています。このお方だけが神をあらわすお方だ、それがミカエルのそもそもの意味であるのです。

注解 10：12-13 ⑤

ですから、いつもサタンとの戦いの場に現れる、しかも神をあらわすお方である。そしてユダ書にもあったように、非常に権威のある態度をとっておられる。このようにいろんなことを総合して考えた場合、本当にサタンに対抗して、そして神を表されるお方は、キリストしかおられないわけです。

しかも考えてみますと、ダニエル書はいつも最後はキリストに行っています。2章ではキリストを表すのは「石」です。7章では「人の子」。9章でははっきり「メシヤなる一人の君」。そして10章でも12章でも、「あなた方の君ミカエル」・・・このように、ミカエルはキリストのことであると理解するのが、いちばん自然であり、妥当であると思われます。



注解 10：14

10：14 **末の日に、あなたの民に臨まんとする事を、あなたに悟らせるためにきたのです。この幻は、なおきたるべき日にかかわるものです。**

つまりこの幻は、11章から12章のはじめにかけてある長い預言は「**末の日**」、つまり最後の時代のことである。しかも「**あなたの民に臨まんとする事を**」中心にしている。最後の時代の神の民が、11章の幻の中心である。これはしばしば見逃されますが、非常に大事な点です。よく11章の幻を見て、「北の王」「南の王」はだれかとそんなことにばかり関心がいきますが、そうではなくて、この11章の幻の中心は、最後の時代の神の民であること。それを天使は最初にはっきり教えてくれています。ダニエルは、パレスチナに帰ったユダヤ人仲間のことを、そしてまた神の民全体のことを心配して祈っていました。それに対して、そのことを語りつつ、一番最後の時代まで、くわしく教えてくれているのが、11章を中心とした預言であるわけです。

注解 10：21

10：21 しかしわたしは、まず真理の書にしるされている事を、あなたに告げよう。わたしを助けて、彼らと戦う者は、あなたがたの君ミカエルのほかにはありません。

「真理の書」。これには、しばしば疑問が出ますが、はっきりした解釈はありません。ただ神の永遠のご計画と目的がしるされている書、と理解しておけばいいでしょう。

※15節～20節の注解はありません。

まとめ

二つのことを学んでおきたいと思います。



(1) 一つ目は「祈り」 **ダニエル**は若い時も年老いてからも、いつも**祈りの人**でした。そして、神は常にその祈りに応えてくださいました。**ダニエル書は祈りの書**です。「あなたが祈りを始めたとき、み言葉が出た」 (9:23)。

「あなたが悟ろうと心をこめ、あなたの神の前に身を悩ましたその初めの日から、あなたの言葉は、すでに聞かれた」 (10:12)。天と地は私たちが思っているよりも、ずっと近い。

まとめ 続き

(2) もう一つは「大争闘」ということです。ダニエル11章は、いろいろと幻を見せてくれますが、世界帝国の背後にある暗黒の勢力に気付かされます。エペソ6：12には「わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである」。

私たちに必要なことはダニエルのように常に祈り、神と共に歩むことです。「**神に忠実に使え** 祈っている者は、いわば神の中に閉じ込められたような者である。彼ら自身は、自分たちがどんなにしっかりと保護されているかを知らない。この世界の統治者たちは、サタンにそそのかされて、彼らを滅ぼそうとする。しかしもし、神の民の目が、ダタンにおけるエリシャのしもべのように開かれるならば、神の天使たちが彼らの回りに陣をしいて、暗黒の軍勢を阻止しているのを見るであろう」（EGホワイト「国と指導者」下196p）。